

# St. Luke's International University Repository

## Comparative analysis of the concept of care / caring in Japanese and English nursing literature

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 操, 華子, Misao, Hanako メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.34414/00014769">https://doi.org/10.34414/00014769</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



# 日本語文献と英語文献における ケア／ケアリング概念の比較分析

操 華 子<sup>1)</sup>、羽 山 由美子<sup>2)</sup>、菱 沼 典 子<sup>3)</sup>、  
岩 井 郁 子<sup>4)</sup>、香 春 知 永<sup>5)</sup>

## 要 旨

日本において「ケア」という言葉がcareの邦語訳として使われ始めたのは第二次世界大戦後のことであり、特に看護・医療界で用いられるようになったのは1970年代からである。医療界において、ケアは一般的に看護ケアを意味している傾向にある。一方、ケアリングという概念は日本の看護界においては比較的新しい概念であり、その適切な邦語訳は検討されずに現在に到っている。英語圏において、ケアリングは看護実践・教育の中核として位置づけられ、研究、理論に多大な影響を与えている。

本研究の目的は、日本人以外の著者により英語で書かれた文献（英語文献）と、日本人の著者により日本語で書かれた文献（日本語文献）から、英語圏におけるケア／ケアリング概念と、日本の看護界におけるケアの概念との比較分析を行うことである。

英語文献の結果は既に発表した先行研究の分析結果を用い、今回対象とした日本語文献は、事例検討、総説、概説、研究論文を含む77編である。英語文献から抽出したカテゴリー、サブカテゴリー、ケアリング属性を用いて、日本語文献の内容分析を実施した。

英語文献の分析の結果、5つのカテゴリーと13のサブカテゴリー、および102のケアリング属性が明らかになった。その5つのカテゴリーは、看護婦の特性、看護活動、患者－看護婦（ケア提供者）の関係性、ケアリングによってもたらされるアウトカム、その他であった。

77編の日本語文献の分析の結果、文献全体でケアという用語を使用していた文献と看護その他の言葉を使用していた文献とに大別された。大別された文献の結果を比較すると、各カテゴリーの全体における割合は、両文献間で同様の傾向を示していた。ケア、看護ケア、看護、援助などの用語は同義語的に使用されている傾向があり、これらの多くは看護行為を意味していることが示唆された。

日本語文献と英語文献との結果を比較すると、文献から抽出されたケアリングの要素の数は異なっていたが、各カテゴリーにおける件数の全体に占める割合においては、両文献共、同様の傾向を示していた。このことから、文化的要素、言語の違いにかかわらず、ケア／ケアリング概念に対する共通の認識が存在することが明らかになった。

### キーワード

ケア／ケアリング    文化間比較    概念分析

## I. はじめに

英語圏におけるケア／ケアリングの研究はLeininger, M. M.が博士課程在学中に行った文化人類学的視点からケアリングに関する研究に着手したのがその始まりであるといえる。また、1978年に

1) 前聖路加看護大学  
2) 聖路加看護大学  
3) 聖路加看護大学  
4) 聖路加看護大学  
5) 聖路加看護大学

Leininger, M. M.らによって設立されたNational Caring Research Conference (全米ケア研究会議)を契機に、ケア/ケアリングの概念は看護学の中で検討され、看護の主要な概念の一つとして位置づけられている。その後、1970～80年代、多くの研究が実施され、理論が発表され、現在では看護実践ならびに教育の本質として、また看護を説明するのに不可欠な概念として捉えられている。

careという英単語がカタカナ語のケアとして最初に日本に紹介されたのは第二次世界大戦直後のことである。戦後、米国から食糧や医療の欠乏していた日本人に様々な物資が配給された。この物資はケア物資と呼ばれ、Cooperative for American Remittances to Everywhere, Inc.の頭文字をとって表現されたものである<sup>1)</sup>。

この英語圏で使われているcareという言葉が紹介されていなかった戦前の日本においても、この言葉が持つ意味は福沢諭吉や正岡子規の著作の中で表現されている<sup>2)</sup>。現在、careの邦語訳として世話、関心、配慮などがあるが、特に1970年半ば以降、多くはカタカナ書きのケアを使用している傾向にある。大辞林(三省堂)には1988年に見出し語として登場し、1991年に広辞苑(岩波書店)にも載せられた。1993年に発刊された辞林21(三省堂)では、それまでの世話、介護という説明ではなく、看護、医療・心理的援助を含めた広い概念であるということが説明されている<sup>3)</sup>。しかし医療界では、一般的にケアは看護ケアを意味している場合が多い。

一方、caringは、日本の看護においては、1980年代に輸入されてきた言葉であり、訳語はケアリングとカ

タカナ語で使用されている。特に1989年コロラド大学保健科学センター看護学部長、ヒューマン・ケアリング・センター所長のジーン・ワトソンが日本看護科学学会第1回国際学術セミナーに招聘され、「ヒューマン・ケアリング理論の新次元」というテーマで行った講演<sup>4)</sup>の日本の看護界への影響は大きい。

このようにケア、ケアリングが日本に入ってきた経緯は異なっているが、現在、日本の看護界においても重要な概念として位置づけられてきている。しかし未だ、ケア、ケアリングならびに看護ケアのそれぞれの概念・定義は曖昧であり、今後明確にしていく必要がある。

先行研究において、英語圏で発表された47編の実証的研究論文を対象に、ケア/ケアリング概念の分析を行った<sup>5)</sup>。47編の研究論文の内訳は、研究デザインに量的方法を用いている17編の論文(研究者9名)と質的方法を用いている30編の論文(研究者21名)であった。

そこで本研究の研究目的は、ケア/ケアリング概念に関する先行研究の結果を用いて、日本語で書かれた文献におけるケアの概念を分析すること、また英語圏におけるケア/ケアリング概念と日本の看護界におけるケアの概念との比較分析を行うことである。

## II. 研究方法

### 1) 対象となる文献の収集方法

日本人の著者によって日本語で書かれた文献(以下日本語文献と略す)の検索は、オンライン検索(JMEDICINE)と主要な雑誌の巻末索引によって行った。オンライン検索では、careに該当するケア、看

表1 研究対象とした日本語の文献

	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994
看護									1					
看護学雑誌			1	2	1		1			1				1
看護管理												1		
看護技術		5			3	3		4	8	1				
看護教育							1							
看護展望						1	1		1	2				
看護実践の科学								1			3	2		
助産婦雑誌										1				
千葉大学看護学部紀要														2
日本看護科学学会誌									1					1
日本看護研究会雑誌												2		
ペリネイタルケア							1							
保健婦雑誌					1		2			1				
臨床看護		1				1		4	2	3	7	2		

表2 英語文献のカテゴリー分類の結果5)

カテゴリー／サブカテゴリー	件数 (%)	
	カテゴリー	サブカテゴリー
1. 看護婦の特性	72 (17.6)	
1) 個人的特性		30 (7.4)
2) 専門職としての特性		42 (10.3)
2. 看護活動	230 (56.6)	
1) 個別的／具体的看護行為・行動		160 (39.2)
2) 看護の提供スタイル		47 (11.8)
3) タッチング		10 (2.5)
4) そばにいる		12 (2.9)
5) 患者の権利擁護		1 (0.2)
3. 患者－看護婦(ケア提供者)の関係性	62 (15.0)	
1) 先行条件		23 (5.6)
2) プロセス		22 (5.4)
3) 機能		17 (4.2)
4. ケアリングによってもたらされるアウトカム	39 (9.6)	
1) 患者のアウトカム		34 (8.3)
2) 看護婦(ケア提供者)のアウトカム		1 (0.2)
3) 患者・看護婦(ケア提供者)のアウトカム		4 (1.0)
5. その他	5 (1.2)	
合 計	408 (100.0)	

看護ケア、ケアリングをキーワードとし、先行研究と同様に患者(クライアント)と看護婦(ケア提供者)間のかかわりに焦点をあてた文献を対象文献として選択した。

その結果、1981年～1994年までに発表された941編の文献から、110編の文献を無作為に選択した。この110編の文献のうち、看護職以外の著者によって書かれた文献20編と、ケア/ケアリングに焦点があてられていない13編の文献を対象文献から削除した。最終的には、77編の日本語文献が対象文献となった。その内訳は、事例検討38編、総説21編、概説14編、研究論文4編であった。1982年～1994年間に発刊された14種類の雑誌から77編の日本語文献を収集した。(表1)

日本語文献の選択にあたっては、ケア/ケアリングに焦点があてられていた研究論文の数が少数であったこと、そのため研究論文のみを対象文献としてしまうことは、日本におけるケア/ケアリングの概念の考えられ方が反映されにくくなり、米国との比較を行うには不十分であると考え、対象文献の中に研究論文以外の文献も含めた。

2) 分析方法

先行研究で対象とした日本人以外の著者が英語で書いた47編の実証的研究論文(以下、英語文献と略す)の分析から、5つのカテゴリー、13のサブカテゴリー、102のケアリング属性が明らかになった。5つのカテゴリーとは、「看護婦の特性」、「看護活動」、「患者－看護婦(ケア提供者)の関係性」、「ケアリングに

よってもたらされるアウトカム」、「その他」であった。(表2)

これらのケアリングの属性、サブカテゴリーならびにカテゴリーを用いて、対象となった77編の日本語文献の内容分析を行った。

(1)第一段階

英語文献から抽出された102のケアリング属性を用いて、3編の日本語文献の内容分析を行った。分析方法の検討を行い、本研究のチームメンバー全員で実施した。

(2)第二段階－本分析の段階

第一段階の分析結果により、日本語文献の内容分析を実施していく際のフォーマットを作成し、本研究チームメンバーと本研究への協力の得られた大学院生4名で74編の日本語文献の分析を行った。

(3)分析の妥当性

日本語文献の内容分析の妥当性を高めるために、第二段階の作業を二人一組となって実施した。本研究チームメンバーと協力の得られた大学院生とが一組となって実施した。各々が実施した分析結果の妥当性についてお互いに検討を行った。

さらに、日本語文献の内容分析の結果すべての検討を、本研究チームで、該当文献と照合しながら実施した。内容分析の結果は、本研究チーム間で一致をみた。

表3 日本語文献の分類の結果

カテゴリー／サブカテゴリー	件数 (%)	
	カテゴリー	サブカテゴリー
1. 看護婦の特性	110 (7.8)	
1) 個人的特性		14 (1.0)
2) 専門職としての特性		96 (6.8)
2. 看護活動	761 (53.7)	
1) 個別的／具体的看護行為・行動		613 (43.3)
2) 看護の提供スタイル		121 (8.5)
3) タッチング		7 (0.5)
4) そばにいる		11 (0.8)
5) 患者の権利擁護		9 (0.6)
3. 患者－看護婦 (ケア提供者) の関係性	170 (12.0)	
1) 先行条件		30 (2.1)
2) プロセス		95 (6.7)
3) 機能		45 (3.2)
4. ケアリングによってもたらされるアウトカム	305 (21.5)	
1) 患者のアウトカム		257 (18.1)
2) 看護婦 (ケア提供者) のアウトカム		34 (2.4)
3) 患者・看護婦 (ケア提供者) のアウトカム		14 (1.0)
5. その他	70 (4.9)	
合計	1416 (100.0)	

## I. 研究結果

### 1) 使用されている用語による日本語文献の分類

研究対象となった77編の日本語文献では、著者がその文献全体で使用している用語によって、2つに大別された。一つはケアをそのまま使用している文献であり、29編であった。もう一方は、看護、援助などの用語を用いている文献であり、48編であった。

分類を行っていくなかで、前記の用語を混在させて用いている文献もみられた。この場合、それぞれの用語が用いられている文脈を考慮し、最も適切であると研究者間で判断した用語に分類をした。

### 2) 日本語文献の分析結果

77編の日本語文献から、1416件のケアリングの要素が抽出された。これらの要素を分類した結果が表3である。(表3)

#### (1) 看護婦の特性

この特性とは、生来備えておくべき個人的特性と看護婦として備えておくべき専門職としての重要な特性を含むカテゴリーであり、110件 (7.8%) であった。サブカテゴリーの①個人的特性には14件、②専門職としての特性には96件が含まれた。専門職としての特性には、態度、知識、臨床能力などに関する内容を含めた。

#### (2) 看護活動

看護婦が患者のニーズを充足するために提供する具体的かつ個別的な看護行為・行動、その看護行為がど

のように提供されるかという提供のスタイルを含むケアリングの表現、ケアリング行為のカテゴリーであり、761件 (53.7%) であった。これらは、患者－看護婦 (ケア提供者) 間の関係を築くための基礎、土台となる部分である。サブカテゴリーの①個別的／具体的看護活動は613件であり、身体的／直接的ケア、臨床判断、コミュニケーション、指導・教育などに関する内容を含めた。②看護の提供スタイルは121件であり、患者に看護婦 (ケア提供者) の全神経を集中させる、患者を最優先する、業務時間外でも患者のために何かを行おうとする努力などを含めた。

#### (3) 患者－看護婦 (ケア提供者) の関係性

この関係性は、患者と看護婦が日々の看護活動を通し、両者のかかわりの究極の目的であるケアリングにもとづく関係 (caring relationship) を築き、その関係を深めていくプロセスおよびその関係の機能を含めたカテゴリーであり、170件 (12.0%) であった。サブカテゴリーの①先行条件には、看護婦側のモチベーションとして患者への関心、心配などが含まれ、患者－看護婦関係を開始するための動機、必要条件に関する内容を含めた。②プロセスには、共感、関与、患者との共同、理解など患者－看護婦関係の経過に関するものを含めた。③関係性もつ機能には、支持・サポート、力を与える、保護、励ましなどを含めた。

#### (4) ケアリングによってもたらされるアウトカム

このアウトカムとは、ケアリングによって患者、看護婦、その両者にもたらされるアウトカムを示す内容

を含めたカテゴリーであり、305件 (21.5%) であった。サブカテゴリーの①患者のアウトカムには、肯定的感情、主観的体験などを含めた。②看護婦のアウトカムは専門職としての自己実現の内容を含めた。③患者・看護婦両者のアウトカムは、両者の関係によりお互いに利益を得たこと、成長などを含めた。

(5)その他

上記のカテゴリーのいずれにも含まれない内容を含めた。

3) ケアを使用していた文献と看護その他の用語を使用していた文献との比較

1416件のケアリングの要素のうち、用語としてケアを使用した日本語文献29編から433件が抽出され、残り983件は看護、援助などの用語を使用していた日本語文献から抽出された。(表4)

ケアを用語として使用していた日本語文献から抽出された433件のケアリングの要素の分析の結果、「看護婦の特性」は46件 (10.6%)、「看護活動」は220件 (50.8%)、「患者-看護婦の関係性」には54件 (12.5%)、「ケアリングによってもたらされるアウトカム」は98件 (22.6%)、「その他」15件 (3.5%) であった。

看護、援助などの用語を使用していた日本語文献から抽出された983件のケアリング要素の分析の結果、「看護婦の特性」は64件 (6.5%)、「看護活動」は541件 (55.0%)、「患者-看護婦の関係性」には116件

(11.8%)、「ケアリングによってもたらされるアウトカム」は207件 (21.1%)、「その他」55件 (5.6%) であった。

ケアを使用していた文献29編と看護その他の用語を使用していた文献48編の結果を比較すると、明らかになった各カテゴリーの全体における割合は同じような傾向がみられた。(図1)

「看護婦の特性」のカテゴリーにおいては、ケアを使用していた文献では10.6%であったが、看護その他の用語を使用していた文献では6.5%であった。「看護活動」のカテゴリーは、それぞれ50.8%、55%であり、最も件数の多いカテゴリーとなった。「患者-看護婦の関係性」のカテゴリーでは、ケアを使用していた日本語文献では12.5%、看護その他の用語を使用していた文献では11.8%であった。「ケアリング」によってもたらされるアウトカムのカテゴリーは、22.6%、21.1%と同様の割合を占めていた。

4) 英語文献と日本語文献の比較

本研究で比較を行った日本語文献ならびに英語文献の概要を表5に示す。(表5)

49編の英語文献と77編の日本語文献の各カテゴリー件数と割合は表6に示す通りである。(表6)

英語文献から抽出されたカテゴリーの要素は408件であったのに対し、日本語文献におけるカテゴリー件数は1416件であった。これらの比較において、英語文

表4 ケアを用いていた文献と看護その他の用語を使用していた文献の分類の結果

カテゴリー／サブカテゴリー	件数 (%)			
	ケア		看護その他の用語	
	カテゴリー	サブカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
1. 看護婦の特性	46 (10.6)		64 (6.5)	
1) 個人的特性		10 (2.3)		4 (0.4)
2) 専門職としての特性		36 (8.3)		60 (6.1)
2. 看護活動	220 (50.8)		541 (55.0)	
1) 個別的／具体的看護行為・行動		179 (41.3)		434 (44.2)
2) 看護の提供スタイル		31 (7.2)		90 (9.2)
3) タッチング		5 (1.2)		2 (0.2)
4) そばにいる		3 (0.7)		8 (0.8)
5) 患者の権利擁護		2 (0.5)		7 (0.7)
3. 患者-看護婦 (ケア提供者) の関係性	54 (12.5)		116 (11.8)	
1) 先行条件		11 (2.5)		19 (1.9)
2) プロセス		28 (6.5)		67 (6.8)
3) 機能		15 (3.5)		30 (3.1)
4. ケアリングによってもたらされるアウトカム	98 (22.6)		207 (21.1)	
1) 患者のアウトカム		77 (17.8)		180 (18.3)
2) 看護婦 (ケア提供者) のアウトカム		18 (4.2)		16 (1.6)
3) 患者・看護婦 (ケア提供者) のアウトカム		3 (0.7)		11 (1.1)
5. その他	15 (3.5)		55 (5.6)	
合計	433 (100.0)		983 (100.0)	

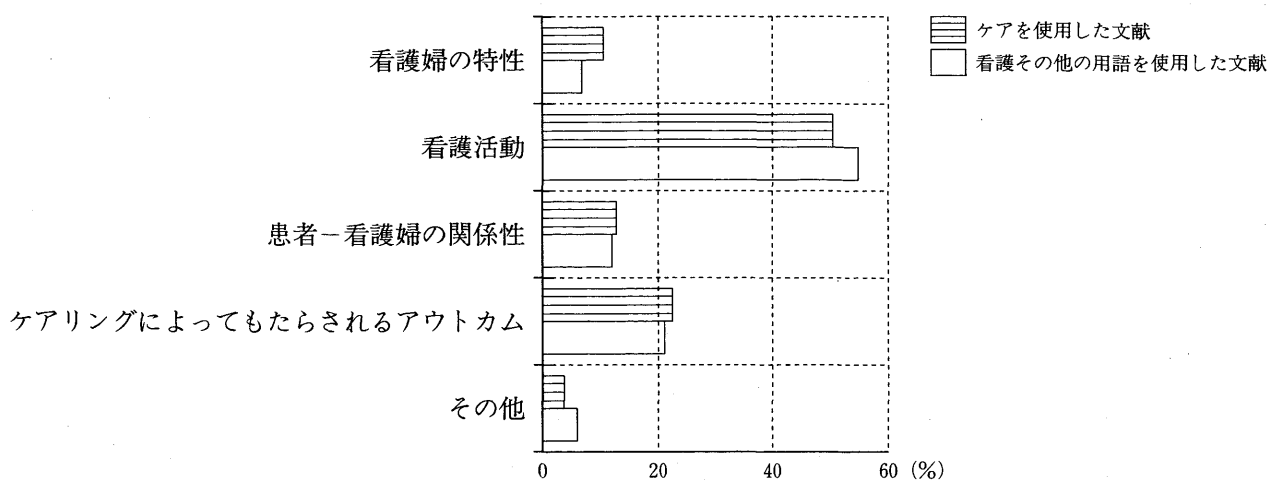


図1 日本語文献の結果の比較—ケアを使用した文献と看護その他の用語を使用していた文献との比較

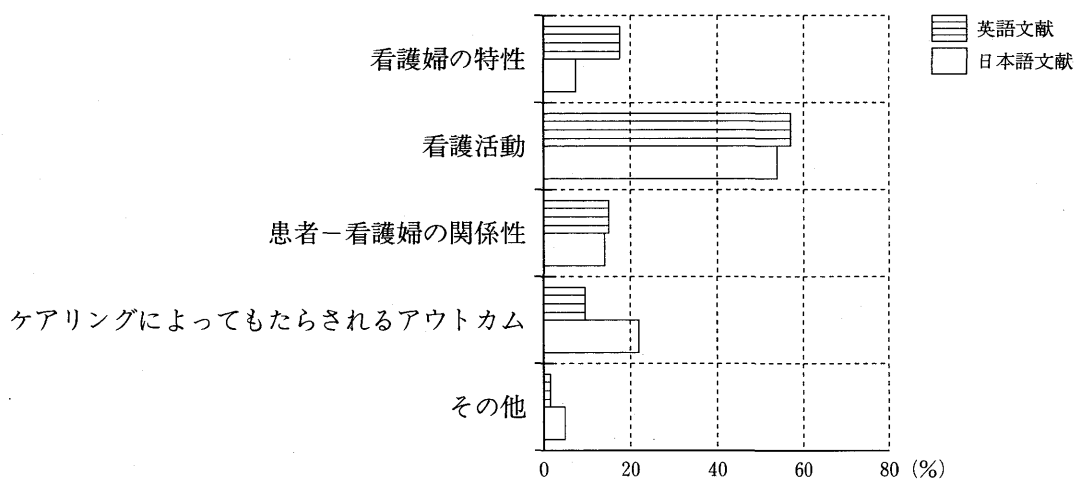


図2 英語文献と日本語文献の結果の比較

表5 比較を行った日本語文献と英語文献の概要

	日本語文献 n=77	英語文献 N=47
検索を実施した期間	1981-1994	1975-1994
検索方法	オンライン検索(JMEDICINE) 雑誌巻末索引	オンライン検索(MEDLINE, CINAHL)
キーワード	ケア、看護ケア、ケアリング	CARE, CARING
文献の種類	研究論文、総説、事例検討	実証的研究論文

表6 英語文献と日本語文献の結果の比較

カテゴリー	件数 (%)	
	英語文献	日本語文献
1. 看護婦の特性	72 (17.6)	110 (7.8)
2. 看護活動	230 (56.6)	761 (53.7)
3. 患者-看護婦(ケア提供者)の関係性	62 (15.0)	170 (12.0)
4. ケアリングによってもたらされるアウトカム	39 (9.6)	305 (21.5)
5. その他	5 (1.2)	70 (4.9)
合計	408 (100.0)	1416 (100.0)

献と日本語文献の各カテゴリーの件数の割合は似通ったものであった。(図2)

英語文献、日本語文献の結果の両方において、分類したケアリングの要素の件数が最も多かったカテゴリーは、「看護活動」であった。英語文献では56.6%、日本語文献では53.7%であった。看護活動のサブカテゴリーである「個人的/直接的なケア」では、英語文献では39.2%、日本語文献では43.3%であり、全体に占める割合が最も大きかったサブカテゴリーであった。「患者-看護婦(ケア提供者)の関係性」は、英語文献では15%、日本語文献では12%であった。

一方、両者間で差がみられたカテゴリーは、「看護婦の特性」と「ケアリングによってもたらされるアウトカム」であった。「看護婦の特性」は日本語文献では7.8%、英語文献では17.6%であった。「ケアリングによってもたらされるアウトカム」は、日本語文献では21.5%、英語文献では9.6%であった。

#### IV. 考 察

##### 1) 日本語文献におけるケア/ケアリング概念

日本語文献はケアという用語を用いている文献と、看護あるいは援助等、ケアという現象を別の用語で表現していた文献とに大別することができた。抽出されたケアリング属性の分類結果については既述した通りであるが、ケアを用いていた文献と、看護あるいはその他の用語を用いていた文献の結果は、同様の傾向がみられていた。

ケア、看護ケア、看護、援助あるいはその他の言葉は、日本の看護に関する文献の中で、よく使われている用語であり、一般的に看護行為を意味していることが多い。このことは、日本語文献のカテゴリー分類を行った本研究結果においても、「看護活動」のカテゴリーに分類されたケアリングの要素の件数が最も多く、またサブカテゴリーにおいても「個人的・直接的ケア」に含まれたケアリングの要素が最も多かったことから明らかである。これらから、日本においては、ケア、看護ケア、援助、看護という用語が使用される場合、その用語が意味している内容は明確ではなく、同義語的で互換性をもった言葉として使われている傾向にある。ナイチンゲールの「看護覚え書き」の中でケアという言葉が使用されていたのは、39箇所あり、それらの日本語訳は、世話、配慮、注意、気遣い、看護と訳されている<sup>6)</sup>。これらの訳し方の違いは、ケアという言葉が使用されていた文脈を考慮した上でのことであると推察できるが、ケアの定義、その意味が明確になされていなかったためとも考えられる。この点については、Leininger, M. M.もケアリング概念の曖昧さの中で同様に指摘している<sup>7)</sup>。彼女は、ケア、ケアリングならびに看護ケアという言葉

区別するための科学的な、ヒューマニスティックな知識の基盤は存在せず、さらにケアやケアリングの効果というものは限られた中でしか認められず、理解されないままであると述べている。このようなケア、ケアリング、看護ケアという言葉、それぞれが持つ意味内容を明確にしないままに、米国においても看護婦達は同義語的に用いている。本研究結果からも、米国だけでなく、日本においても、看護ケア、ケア、ケアリング、さらには看護や援助という言葉が、各個人の中で概念が明確にされずに、一般的に使用されている傾向がみられている。

##### 2) ケア/ケアリング概念の比較

今回、比較を行った英語文献はケア/ケアリングを研究テーマとした実証研究論文のみであったが、日本語文献においては研究論文だけでなく、総説、概説、ならびに事例検討等も今回の研究対象論文の中に入れて、両文献の分析結果を比較したことは、研究対象とした論文の均一性という点において本研究の限界である。しかし、この限界を考慮に入れたとしても、英語と日本語という使用されている言語の違いにかかわらず、ケア/ケアリングに対する共通の認識が存在するということが考えられる。

vonEssenらは、米国とスウェーデンという異なった文化間で、ケア/ケアリングに対する看護者ならびに患者の認識について比較を行っている<sup>8)9)</sup>。米国のLarson, P.が開発した看護婦が行うケアリング行動に関する質問用紙をスウェーデン版に修正した上で調査を2度実施した結果、スウェーデンの看護職のケア/ケアリング行動に対する認識において、米国との顕著な違いは見られず、同様の結果であったと報告している。

このように、記述されている言語の違いならびにその文化的背景の違いにかかわらず、ケア/ケアリング概念として共通に重要であると認識される要素が存在するといえるであろう。

一方、英語文献と日本語文献とを比較した結果、「看護婦の特性」のカテゴリーにおいては英語文献の方が割合が高く、「ケアリングによってもたらされるアウトカム」のカテゴリーには、日本語文献の方が含まれたケアリングの要素が多いという違いがみられた。前述したように、研究対象とした日本語文献の中には37編の症例研究を含めた。そのため、患者と看護婦のかかわりの結果が本研究における「ケアリングによってもたらされるアウトカム」として抽出され、英語文献よりもその割合が多くなったと考えられる。

筒井は、臨床経験年数が5年~16年、平均8.2年の45名の看護婦を対象に、日本におけるケアリングの諸属性を明らかにすることを目的に質的調査を実施している<sup>13)</sup>。その結果、患者との関係性において、1) 察する、2) 遠慮、3) おまかせ、4) 看護職の教育背景と



いう4つのカテゴリーを明らかにしており、日本の患者と医療スタッフとの関係性を特徴づけるケアリング属性は、日本特有の文化を反映したものとなっている。

操らは、米国のCronin, PとHarrison, P. (1989)が開発したCaring Behaviors Assessmentを翻訳し、日本文化特有の質問項目を追加した看護婦が行うケアに関する調査用紙を作成し、323名の看護婦を対象に調査した<sup>10)11)12)</sup>。その結果を米国の同様の調査結果と比較したところ、患者を安心させること、患者の話に傾聴すること、患者を尊重することなど、常に患者を中心に看護を提供すること、患者の精神面に働きかけていくことが共通に重要であると認識されていた。一方、米国の研究結果では、医師を呼ぶ時期を判断できること、タッチング、患者の感情表出を促すこと、またナースコールに迅速に応えることや頻回に患者を見回ることによる患者とのかかわりに関する内容が、重要なケアリング行動として認識されていた。操らの研究結果においては、看護婦的的確な手技、的確な技術を提供するための知識、患者への配慮、気遣いなどに関する内容が重要なケアリング行動として看護婦に認識されていた。看護婦が重要であると認識をしているケアリング行動においても文化の異なる米国と日本との共通性と共に相違性が明らかになっている。

Leininger, M. M.は、「文化ケア理論」の前提の一つとして、文化ケアの概念、意味、表現、パターン、過程、および構成形態には、世界中のすべての文化の間で差異（多様性）と類似（共通性もしくは普遍性）がみられると述べている<sup>14)</sup>。本研究においては、前述したように比較を行った文献の均一性という点における限界はあるが、異なった言語で記述されてはいても、ケア／ケアリングの概念には共通した認識がみられることが明らかになった。同時に、本研究のケアリング属性のカテゴリー分類の結果、その分布の割合において英語文献と日本語文献において差異がみられたように、それぞれに特徴的なケア／ケアリングが存在

することも示唆された。この差異は、言語の違い、すなわちその文化的背景の違いが要因となっていることも考えられる。しかし、本研究では具体的にどのような点において差異が明らかになったのか、またその差異と文化的背景との関係については探求をしていない。この点は、既刊された論文を研究対象とした本研究の限界である。

## V. おわりに

本研究では、ケア／ケアリングとは、患者－看護者間のかかわりの現象からとらえるべきであるという前提にたっている。英語圏で発表されたケア／ケアリングに関する研究論文に共通にみられた特徴と、文化的背景の異なる日本の看護におけるケア概念の特徴との類似性、相違性を探求することを目的として、本研究を行った。

本研究の英語文献の分析結果の詳細については、聖路加看護大学紀要に発表した論文で既に述べているので参照されたい。

文化や使用している言語の違い、あるいは表現方法の違いが存在するとしても、ケア／ケアリングに関する看護職の認識は、基本的には共通性がみられるということ、また同時に相違性、つまり使用されている言語、文化的背景に応じた特徴的なケア／ケアリングも存在するのではないかということが本研究から示唆された。今後はさらに、日本の看護におけるケア／ケアリング概念の特徴を探求していく必要があると考える。その結果、英語圏における本概念の捉えられ方との相違がより一層明確となり、米国から輸入されたままの概念で留まるのではなく、日本の看護における独自のケア／ケアリング概念がさらに構築されていくことになるであろう。

(本研究は、The Japan Academy of Nursing Science, Second International Nursing Research Conference in KOBE, 1995で一部発表した)

## <引用文献>

- 1) 日野原重明：キュアとケア，竹内正監修，医療原論—医の人間学，弘文堂，P.56，1996。
- 2) 前掲書1)，P.56-57。
- 3) 川本隆史：介護・世話・配慮《ケア》を問題化するために，現代思想，21(12)，P.152，1993。
- 4) Watson, M. J.: ヒューマン・ケアリング理論の新次元，日本看護科学会誌，9(2)，P.29-37，1989。
- 5) 操華子・羽山由美子・菱沼典子・岩井郁子・香春知永：ケア／ケアリング概念の分析—質的・量的研究から導き出された諸属性の構造，聖路加看護大学紀要，22，P.14-28，1996。
- 6) 金井一薫：ナイチンゲールにケアの本質を探る，看護展望，別冊2，P.154，1985。
- 7) Leininger, M. M., The Phenomenon of Caring-Importance, Research Questions and Theoretical Considerations, Leininger, M. M. ed. Caring-An Essential Human Need, Wayne State University Press, P. 6, 1988.

- 8) von Essen, L. & Sjöden, P-O: The Importance of Nurse Caring Behaviors as Perceived by Swedish Hospital Patients and Nursing Staff, *International Journal of Nursing Study*, 28(3), P. 267-281, 1991.
- 9) von Essen, L. & Sjöden, P-O: Patients and Staff perceptions of caring-Review and Replication, *Journal of Advanced Nursing*, 16, P. 1363-1374, 1991.
- 10) 操華子・羽山由美子・菱沼典子・岩井郁子・香春知永・横山美樹・豊増佳子：患者・看護婦が認識するケアリング行動の比較分析，第15回日本看護科学学会講演集，P. 130, 1995.
- 11) 操華子・羽山由美子・菱沼典子・岩井郁子・香春知永・横山美樹・豊増佳子：患者・看護婦が認識するケアリング行動の比較分析—第2報，第16回日本看護科学学会講演集，P. 392-393, 1996.
- 12) 操華子・羽山由美子・菱沼典子・岩井郁子・香春知永・横山美樹・豊増佳子：患者・看護婦が認識するケアリング行動の比較分析，*Quality Nursing*, 3(4), P. 32-41, 1997.
- 13) Tsutsui, M., Attributes of Japanese Caring, The Japan Academy of Nursing Science-Second International Nursing Research Conference, P.126-7, 1995.
- 14) Leininger, M. M., Culture Care Diversity & Universality-A Theory of Nursing, NLN, 1992, 稲岡文昭監訳：レイニンガー看護論 文化ケアの多様性と普遍性，医学書院，P.49, 1995.

# Comparative Analysis of the Concept of Care/Caring in Japanese and English Nursing Literature

Hanako Misao, Yumiko Hayama, Michiko Hishinuma, Ikuko Iwai, Chie Kaharu  
(St. Luke's College of Nursing)

The term *kea* (care) has been used in Japanese nursing since the 1970's. Currently, this term is accepted as a common word to mean nursing care in general, but its definition is not so clear. In English literature the concept of caring has had an impact on research and nursing theories over the past two decades. So far, caring is regarded as the essence of clinical nursing practice. However, in Japanese nursing the term "caring" is a relatively new concept. The terms care, caring and nursing care need to be examined in order to clarify "care" in nursing.

The purpose of this study was to compare the nursing concepts, "*kea* (care)" in Japanese literature and "caring" in English literature.

The first sample included forty-seven English language research articles written by 30 authors including qualitative and quantitative research. The second sample included seventy-seven Japanese language articles consisting of 37 case studies, 21 commentaries, 14 overviews, and 5 original research papers. We used the An Analysis of the Concept of Care/Caring: A Structure of Attributes identified from qualitative and quantitative research by Misao, H., et. al., published in 1996 to compare the results of Japanese literature and English literature.

Content analysis of both samples was conducted separately. From the English sample 408 caring theme/attributes were selected, and they were grouped into 102 attributes, 13 subcategories and 5 categories. The Japanese sample was analyzed using 102 identified caring attributes.

From the English sample 5 categories were identified, Characteristics of Nurse, Nursing Activities, Patient-Nurse Relationship, Caring Outcomes, and Others.

Japanese articles were grouped by authors into 2 types. One used "care (*kea*)" and the other used "nursing-(*kango*- and others)". In Japanese nursing, several terms are generally used to describe nursing acts and they are *kea* (care), *kango* (nursing), *enjo* (helping).

In Japanese articles *kea* (care), *kango* (nursing), *kango-kea* (nursing care) and *enjo* (helping) are used interchangeably by nurse authors. In comparison with English articles, Japanese articles used either *kea* (care) or *kango* (nursing) to refer to the caring attributes of nursing care.

## KEY WORDS:

care/caring, cross-cultural research, conceptual analysis